

令和7年度日本大学大学院商学研究科博士前期課程一般・社会人入学試験(第1期)

外国語科目(英語) 商学専攻 解答又は解答例

第1問

パンデミック以降、中国の貿易黒字の拡大と米国の貿易赤字の増加は、世界経済の不均衡に関する議論を再燃させている。多くの懸念は、中国の黒字が国内需要の低迷に対応するための輸出促進を目的とした産業政策に起因するかどうかに焦点が当てられている。しかし、より深いマクロ経済的視点では、これらの貿易収支は単なる政策的措置にとどまらず、主に国内の経済要因によって影響を受けていることが明らかである。

パンデミックの間、中国の貿易黒字は急増した。これは、当初、医療機器の輸出の増加と、サービスよりも財への消費行動のシフトが主な要因だった。しかし、2021年後半には、不動産市場の調整と継続的なロックダウンの影響で内需が弱まり、家計の貯蓄が増加し、投資が減少した。これに対して、米国では政府支出と貯蓄の減少によって需要が急増し、経常収支が悪化した。

このシナリオは二つの重要な点を示している。第一に、世界的な実質金利が上昇し、世界的な貯蓄過剰という考え方に挑戦していること。第二に、両国の対外収支は主に国内の状況によって形成されていること。

中国にとっては、不均衡に対処するために構造改革を実施することが重要であり、特に不動産部門と高齢化社会を考慮する必要がある。米国も対外収支を改善するために、大幅な財政調整が必要である。

産業政策に対する懸念は依然として続いており、中国の広範な補助金は貿易摩擦を引き起こし、国際競争力に影響を与える可能性がある。効果的な多国間ルールを確立し、産業政策の焦点を絞ることは、公正な競争を維持するために不可欠である。これらの根本的な国内問題に対処することは、両国が持続可能な経済バランスを達成し、より安定した世界経済環境を醸成するために極めて重要である。

令和7年度日本大学大学院商学研究科博士前期課程一般・社会人入学試験(第1期)

外国語科目(英語) 商学専攻 解答又は解答例

第2問

事実、資本主義は、シュンペーター自身と少し似ている。つまりそれは、大胆で、生き生きとし、新しいアイデアにあふれ、そして決して立ち止まらない。シュンペーターの表情は輝きと機知に富んでいるけれども、その裏側には、悩ましい気持ちが隠されている。シュンペーターは、理解しようと試みた資本主義において、影の部分を探したのである。「資本主義は生きのびるか」とシュンペーターは問う。「いや、私はそうは思わない」と考えた。

資本主義の活気は、それ自体を破壊する憂鬱の種を含んでいる。その理由について、シュンペーターは、経済学者が一般的に行わない方法で説明した。彼は、経済ではなく、資本主義社会の政治と文化について論じたのである。カール・マルクスがなぜ資本主義が滅びゆくのかについて、経済学の観点から次のように説明をした。すなわち資本家が、生み出されたものをよりいっそう利潤として得れば得るほど、労働者はその取り分がよりいっそう少なくなり、最終的には、その全体系は崩壊すると。しかしながらシュンペーターにとって、資本主義の経済の側面は問題がないものであった。その問題は、資本主義が人々の幅広い態度に与える影響の中にあって、とりわけ、企業がより大きくなったときに生じるのである。企業家が成功すれば、企業は成長する。結果的に巨大な企業が登場し、新しい製品を市場に提供するために最新技術を用いる。そのときイノベーションは、合理的な方法で生じるものの、しばしば特殊化された企業の研究部門においてもたらされる。たとえば、今日の大会社の一つであるApple社を考えてみよう。そこでは、さまざまな研究チームがある。新しいソフトウェアを開発したり、速くて軽いiPhoneを製造したり、よりパワフルなラップトップを創造したりするチームである。かつては企業家によって天才的なひらめきで視覚化された製品は、現在では、試行錯誤の手続きで入手することができるようになった。つまり経済の進歩は、会社の方針や会議によって、自動化されるようになっているのだ。

令和7年度日本大学大学院商学研究科博士前期課程一般入学試験（第1期）

外国語科目（日本語） 商学・経営学・会計学専攻（共通） 解答又は解答例

第1問

問1

研究者は複雑な現実から研究が必要だと考える一部分を取り出し、それを問題として設定し、その問題を引き起こしていると考えられる原因を探究していく。

複雑な現実から問題を取り出す範囲や方法、そして原因として考えられる要因は無数にある。研究者が、自身の研究経験や体験、社会的な関心や研究上重要視されていることなどを勘案して主体的に探究すべき問題を設定し、適切な原因を選び出すことを行っていく。

問2

「何を知るか」とは、具体的な学問の内容を学ぶことであり、「いかにして知るか」とは、科学的思考方法や研究方法、つまり研究の方法論のことを意味する。

社会が安定していて全く変化がないような状況であれば、大学で学ぶ学問の内容は一生使うことができるであろう。しかし、加速度的に発展する現代においては、大学でいくら最先端の学問の内容を学んでも、それを長期にわたって使っていくことはできなくなる。そのため、変化する社会では、常に学ぶことが求められるため、「いかにして知るか」という方法を身につける基本的な学習が大学教育では中心的な機能とならなければならない。

令和7年度日本大学大学院商学研究科博士前期課程一般入学試験（第1期）

外国語科目（日本語） 商学・経営学・会計学専攻（共通） 解答又は解答例

第2問

設問1 解答例

西洋近代科学において自然界の普遍的な因果法則を見出そうとする心性は、キリスト教に由来するものと考えられている。すなわち、神は世界を創造され、そこに法則を置かれた、それはいかなる意図によるものかを読み解こうとする考えである。西洋では17世紀の科学革命の頃からこうした考え方が主張されるようになり、自然の研究をすることは神の意図を読み解くことと同義に捉えられてきた。ここから「主体」と「客体」という図式が生まれたといえる。すなわち、対象を観察して認識する「主体」と、観察される「客体」とを分離し、自己という主体を世界の外側に置いて、世界を客体として観察しようとする姿勢である。これはやはり、キリスト教の精神といえる。

設問2 解答例

西洋近代科学の特徴は次の4点に集約される。

(1) 普遍的な因果法則を求める

普遍的な因果法則とは、いつどこで誰が観察しても、どんな条件でも同じことが起こらなければならないことを指す。そして、実験によって再現可能であること、原因と結果は説明可能なメカニズムによる因果関係の連鎖でつながっていることが求められる。

(2) 合理的であり、実証的である

これは物理学者ガリレオ・ガリレイと哲学者フランシス・ベーコンの精神を表したものとされ、問題を分解して実験し、法則を数量的に表すこと、魔術や超自然による説明を排して、論証し、対話して、陪審員裁判の精神で自然の解明に当たるべきものとされる。

(3) 要素還元論である

要素還元論とは、対象や問題を部分や階層に分解して、それぞれの部分を解明すれば、それらを合成・総合することにより全体像が理解できるとする考え方である。

(4) 主体と客体という図式の世界認識

対象を観察して認識する「主体」と、観察される「客体」とを分離し、自己という主体を世界の外側に置いて、世界を客体として理解しようとする。